

1862年第2回ロンドン万国博覧会における「日本」

“Japan” in The International Exhibition of 1862, London

楠元町子

KUSUMOTO Machiko

キーワード：第2回ロンドン万国博覧会、日本の展示品、文久遣欧使節団

1. はじめに

1851（嘉永4）年イギリスの首都ロンドンで「全人類が現在までに到達した技術、産業、文化を示す」¹という主旨の下に、万国博覧会が世界で初めて開催された。博覧会は18世紀後半にフランスが、産業技術の発展を目的に国内の生産品を展示したことに始まった。しかし博覧会が国内博覧会から万国博覧会に移行し、世界中のあらゆるものを集め展示することにより、博覧会は産業技術の成果だけでなく、各国の文化の多様性も表現する空間となった。入場者は会場内を歩くことにより、各国の産物に象徴された「世界」を一周し、異文化を体験することができたのである。

ロンドン万博の大成功に刺激され、万博は1853（嘉永6）年にはニューヨークで開催された。1855（安政2）年にはパリ万国博覧会が、美術品のための専用の展示館を新設するなど、万国博覧会は規模を拡大しながら、19世紀後半から20世紀にかけて先進諸国で次々と開催された。

鎖国体制を取っていた日本に、ペリー（*Matthew Calbraith Perry*, 1794-1858年）が来航し、開国を迫ったのは万博が初めて開かれた2年後、1853（嘉永6）年であった。翌年日本は日米和親条約を結び、世界に向けて交流を開始したのである。日本の展示品が初めて万国博覧会の会場に展示されたのは、1862（文久2）年に開催された第2回ロンドン万博であった。江戸幕府が正式に展示物を送ったのではなく、駐日英国公使オールコック（*Sir Rutherford Alcock*, 1809-1897年）が収集した品物を主にロンドンに送った。

第2回ロンドン万博において日本の展示物以上に英国で注目されたのが、万博会場に姿を現した開港・開市の延期を求めて欧州に派遣された文久遣欧使節団であった。日本は欧州の人々に初めて展示された物と派遣された人の両面から見られ、日本のイメージが形成されたのである。

第2回ロンドン万博に関する主なる研究としては、日本製品出品の経緯とオールコックの万博との関わりを詳しく論じた佐野真由子の著作『オールコックの江戸』²、万博会場での文久遣欧使節団の行動と英国での評価を明らかにした松村昌家の論文「一八六二年ロンドン万博会

場の幕末使節団」³がある。

本稿は、これらの貴重な研究の成果を踏まえて、1862年に開催された第2回ロンドン万博の『公式図解カタログ』や当時の英国の新聞記事、文久遣欧使節団の資料等を考察することにより、日本の展示物の具体的内容と英国での評価を明らかにし、明治初期以降日本がいかに貿易を拡大して、産業力を蓄積したのかの考察を試みたい。

2. 万国博覧会と英国

1) 1851（嘉永4）年第1回ロンドン万博

1851（嘉永4）年5月、第1回ロンドン万博は「全世界の工業の大博覧会」(The Great Exhibition of Industry of All Nation)と銘うって開催された。英国女王ヴィクトリア Victoria Alexandrina,1819-1901年)の夫である主催者のアルバート公 (Albert, Prince of Saxe-Coburg-Gotha, 1819- 1861年)は、万国博覧会（以降、万博）の意義を次のように述べた。「全人類が現在までに到達した発展の度合いを正直に問いかけ、その真の姿を描きだすことであります。そして、新たな出発点を見出して、そこから万国が将来に向けて、さらに努力を重ねるようにすることである。」⁴万博は人類が到達した産業や技術、文化の展示だけでなく、開催国の世界像を表現する場でもあった。

第1回ロンドン万博の会場となった「クリスタルパレス（水晶宮）」は、3,800トンの鋳鉄と700トンの錬鉄、30万枚のガラス、60万立方フィートの木材を用い、英国の絶大な工業力を誇示した。会場の西半分がイギリスの展示場であり、西から中央部にゆくにつれ、カナダ・ノヴァスコシア・西インド諸島などの植民地となり、中央部が英連邦最大の植民地インドの展示場となる。東半分に中国、アラビアとペルシャア、トルコ、ついでスイス、イタリーとなり、スペインとポルトガル、次にフランスが広く占め、ノルウェーとスウェーデン、ロシア、そして最東端がアメリカ合衆国と展示スペースが割り当てられた。⁵その区分けをめぐる、スイスが小国扱いされたことに大いにむくれたように⁶、まさに展示の配置は当時の世界の勢力図であった。

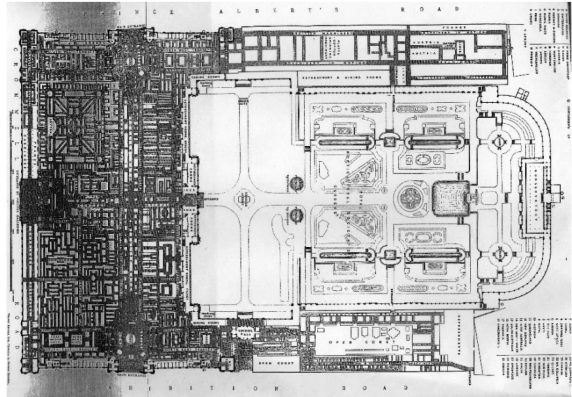
第1回ロンドン万博は144日間の会期中に604万人の入場者を集め20万ポンドの収益をあげた⁷。ロンドン万博の大成功に刺激され、米国は1853（嘉永6）年ニューヨークで開催し、1855（安政2）年にはフランスが5年ごとに開いていた国内博を中止して初のパリ万博を開催し、美術展を新設するなど、万博は規模を拡大していった。

1851（嘉永4）年に世界初の万博を開いて大成功を収めた後、その推進役の役割を果たしたイギリス美術協会（The Society of Arts）は、10年後を目標とした第2回ロンドン万博開催の計画を練り始めた。アルバート公を総裁として設立されていた王立委員会が中心になって、準備を進めるなかで、1859（安政6）年5月フランス・オーストリア（仏墺）戦争が起これ、国際的規模での万博開催の見通しが立たなくなった⁸。1861（文久元）年6月に仏墺戦争が終結し、第2回ロンドン万博は1862（文久2）年5月1日に開催されることになった。万博の開

催に大きな影響を与えていたアルバート公は、1861（文久元）年12月に死去した。

2) 第2回ロンドン万博（1862年ロンドン国際博覧会）

第2回ロンドン万博（The International Exhibition of 1862, London）は、サウスケンジントンにある王立園芸協会庭園の隣接地で開催され、会期は1862（文久2）年5月1日～11月15日、入場者数は約621万人であった。展示会場の面積は23エーカーで、1851（嘉永4）年の第1回ロンドン万博の会場となった水晶宮の19エーカーよりも大きく、経費も前回より2万4,000ポンド多い45万ポンドであった⁹。展示会場は、イギリスと諸外国で折半されていた。参加した諸外国の数は、23か国。ただし日本の場合は、中国とイオニア諸国を合わせて1と数えられている。大英帝国の植民地諸国の展示場は、イギリスに割り当てられたスペースに組み込まれていた¹⁰。



(図1 第2回ロンドン万博会場)

第1回ロンドン万博からの10年の間に、フランス第2共和制の崩壊（1851年）、インド大反乱（1857～1859年）、クリミア戦争（1853～1856年）が起こり、アメリカ合衆国では1861年に南北戦争が勃発するなど、国際社会は大きく揺れ動いていた。このような世界情勢を背景に開催された第2回ロンドン万博は、巨大な新型大砲など軍需産業の展示が目立っていた。「会場に対する評価も悪く、運営上も混乱が多かったが、イギリス人のベッセマーが開発した製鋼法やバベージ計算機といった技術革新の知識や情報が広く世界に伝えられた影響は大きい。」¹¹ 平和のための祭典と言い難い面もあったが、人類に新しい技術を伝達し、進歩に貢献するという万博開催の重要な目的は達せられた。

日本は、第2回ロンドン万博に正式には参加していないが、駐日英国公使オールコックの尽力により日本の展示品が並べられた。ロンドンの大きな話題となったのが、5月1日万国博覧会の開会式に賓客として出席した竹内下野守保徳を正使とする文久遣欧使節団の服装や振る舞いであった。

3. 第2回ロンドン万博と日本

1) 日本製品出展の経緯

1853（嘉永6）年6月米国東インド艦隊司令長官ペリーは、開国と通商を求める米国大統領の国書を江戸幕府に渡した。江戸幕府は、諸大名や幕臣には開国を反対するものも多かったが、ペリーの強硬な態度もあり1854（安政元）年3月に日米和親条約を締結した。その後、イギリ

ス・ロシア・オランダとも同様の条約を結び、200年以上続いた鎖国体制は終わった。1856(安政3)年米国総領事ハリスが下田に着任した。江戸幕府は1858(安政5)年6月、日米修好通商条約を結び、オランダ・ロシア・イギリス・フランスとも同様な条約(安政の五か国条約)を結び、欧米諸国と貿易を開始した。

江戸幕府に第2回ロンドン万博の開催を伝え、万博覧会への出展を進言したのは、初代駐日英国公使のオールコックであった。彼は来日前16年間中国に駐在し、福州領事、上海領事、広東領事を歴任していた。オールコックは1859(安政6)年に総領事兼外交代表として来日し、日英修好通商条の批准など多くの公務に従事する中で、外国人として初めて富士山に登頂し、函館訪問や長崎から江戸までの国内視察旅行を行った。モース事件¹²で香港に赴いたオールコックは、1861(文久元)年末ごろ長崎に帰着し陸路で江戸に戻った。

オールコックが来日した頃の日本は、「外国人は攘夷党(日本差しの極右的な国粋主義者)から敵がい心をもって見られていた。開港場や江戸市中には、殺伐とした雰囲気がただよい、外国人は昼夜をとわず、安心して表を歩くことが出来なかった。」¹³このような中、霊山である富士山に登り、長崎からわが物顔に旅をつづけたことは、日本人にあまり良い印象を与えなかったようである。1861(文久元)年7月5日の深夜英国公使館に水戸浪士が乱入した東禅寺の変(英国公使館襲撃事件)の主なる原因は、「外夷が内地旅行によって神州の地を汚したとするものが最も有力である。」¹⁴オールコックは富士山への登山の帰路、箱根や熱海で日本の伝統工芸品に出会い、数多く入手している。

1861(文久元)年7月4日オールコックは、ロンドンの外務省から全世界の英国代表に宛てた3月13日付の通知を受け取った。そこには、1862(文久2)年5月1日からロンドンで万博が開催されることが決定し、グランヴィル伯爵を総裁とする運営委員会が正式に発足したので各国の万博への参加の可否を知らせること、各国で出品のとりまとめにあたることのできる人物が団体を委員会に紹介してくれるように依頼されていた¹⁵。

オールコックは7月16日、幕府の老中に手紙で万国博覧会の開催を知らせ、万国博覧会は「すべての国の国民が、芸術、工業、農業など、産業のあらゆる分野において、それぞれの達成した進歩を示すのに最もふさわしいと考えるものを何でも送り込むように招かれた場」であると説明し日本も参加すべきであると強く勧めた¹⁶。

2) 日本からの展示品

オールコックが短期間で収集し第2回ロンドン万博に送った日本製品623点は、A~Iの9つに分類され、1から623の番号をふられ『1862年国際博



(図2 THE JAPANES COURT)

覧会公式図解カタログ』に記載された。『公式図解カタログ』の第1巻と第2巻にはイギリス、第3巻にはイギリスの植民地と諸外国の一部、第4巻には関税同盟、イタリア、日本、ペルー、ポルトガル、ロシア、スペイン、アメリカ合衆国等の展示品が記載されている。

『公式図解カタログ』における日本の展示品を以下の表にまとめた。

表1 日本の主な展示品

分類	番号	展示内容	主な展示品
A	1～238	漆器の見本、木に漆を塗ったもの、漆と象眼を施した木、他の材料に漆を塗ったもの、貝殻類、亀甲など	寄木細工(1～140)日本人女性の化粧用品のモデル(141～191A)漆やエナメルを塗ったもの、象牙、貝殻類、亀甲(192～212)寄木細工と木彫細工(213～238)
B	239～297	藁および籠細工の見本	実用品や装飾品のなかに使われた漆(239,240)籠と籐製品(241～297)
C	298～383	磁器や陶器の見本(江戸や横浜から)	花瓶や瓶(298～315)卵殻のように薄い磁器(316～330)大阪から送られたもの(328～330)漆塗りの中国—欧州モデル(331～358)大阪から送られた陶器(359～383)
D	384～517	青銅製品と金属	青銅製品(384～465)金属のバックル(466～488)大工道具一式(489)武器と甲冑(490～509)鋳物(510～517)
E	518～536	紙—紙の原料、壁紙、筆記用の紙、紙のハンカチ、包装用の紙、擬革紙、パピエマシェ	紙の見本(518)女性用の紙製ハンカチ(519)油紙の雨合羽(520)擬革紙製品(521～525)障子(526)扇子(527～530)擬革紙の見本(531)壁紙(532)提灯(534)油紙製の雨傘(534)日本の紙幣(535)紙の原料(536)
F	537～556	織物—縮緬、各種の絹、綴れ織、綿の更紗各種、樹皮で作った織物	縮緬(537,538)絹製品(539～543)綴れ織(544,545)絹製の日本女性の道具箱(548)紳士の筆記用品、ハンカチを運ぶ紙ばさみ(549)綿の更紗各種(550)有松産夏の織物(551)樹皮で作った織物(552～555)人間の髪の毛(556)
G	557～572A	美術作品—象牙の彫刻、木彫り、絵画、挿し絵、版画	木彫り(557)象牙の彫刻(558)挿し絵(559,559A,563)日本の芝居のピラ(560)日本の学者の(560A)江戸の消防署の本(562)江戸の地図(564)東海道、主な都市への道案内(565)日本の地図(566)横浜から富士山への旅の印刷物(568)富士山の地図(569,570)リトグラフ印刷の見本品(561,567,571)物語本(572)日本の公文書の見本品(572A)
H	573～603	教育用の作品や器具科学関係の本、ヨーロッパ的模型と玩具	日本の百科事典(573)日本の大地、山、海の産物の説明(574)絹の修養の秘訣(575)化学の論文(575A)日本の魚の模型と説明書(576,577)化学に関する仕事(578)日本の貴顕紳士録(579)象限儀と時計(580)羅針盤(581,582)日本の職人による歩数計(583)・時計(584)・温度計(585)・望遠鏡(586)玩具(587～603)
I	604～623	その他、外国人や日本人が個人で提供した製品	日本の貝(606)竹製留め鎖(607)婦人用のキセル(608)宝石(609)腕輪(610)日本の硬貨一式(611)飾り棚(612,613) 個人が提供(614～623):青銅製品(614)屏風と花(615)日本の葉と手術器具(616)テーブル(617)箆笥(618)漆器(619)生糸と繭(620)古い漆器と青銅(621)水晶の球(622)生糸(623)

(『1862年ロンドン万博公式図解カタログ』¹⁷89-101頁より作成)

『公式カタログ』は、日本の展示品についてオールコックが具体的使用方法や製作方法を詳細に書いた以下のような説明を付けていた¹⁸。213～238番の西欧では珍しい寄木細工と木彫細工については、「山岳地帯、とくに箱根山脈では、スイスと同じように、冬の間、どの住民も空いた時間を使って、旋削による木工や、木彫細工、寄木細工を行っていた。」と述べ、213番は「箱根の旋削木箱2点、一つは複数の小さな独楽が入っている物、もう一つは卵の巣が入っているもの。」と説明している。

今日特に着目に値する展示品である藁および籠細工については、「日本人は、藁細工を漆と組み合わせて箆笥や箱を作ることに多大な労力を費やし、大いに創意工夫をこらしている。これは、木象嵌をまねたもので鳥や人間、風景などの非常に精緻な図柄が編み込まれている。どんな種類の籠細工においても日本人は卓越しており、優雅なデザインの物を多数製作し、その用途も非常に多岐にわたる。時には内側に漆を塗ることにより、花器や水を運ぶ器を作る。」239番の大型書類箱については、「鮮やかな色の藁を素材として人物と風景が描かれた模造木象嵌で、きわめて素晴らしい作品見本である。」と称賛している。

298～383番はあらゆる種類の陶磁器の見本であり、370番の花立ては非常に古いもので、内側がひび焼きの陶磁器で、外側は樹皮に似せた作りとなっている。371番は3つの小型陶器植木鉢で、大阪と江戸の間にある町瀬戸で制作された磁器と陶器の見本品である。この地はその近隣で作られる陶磁器で非常に名高いため、磁器はよく、瀬戸物と呼ばれる。

460～465番は、独創的な青銅製の道具の見本6点であり、執筆時に墨をするのに必要な水を供給するためのものである。そのいくつかは優美なデザインであるが、それと同じくらいコンセプトは風変わりである。特に462～463番の道具類のアイデアは瓢箪から得られたもので、葉が絡まり、一匹の黄金虫がきわめて完璧に描写されている。464番の道具は、一般的な野菜であるナスから（アイデアを）取ったもので、ヒキガエルも、亀も、竜も、果物もすべて貢献している。教養のある日本人は、日常的頭脳労働「書くこと」に関わるあらゆる付属品について、素晴らしいデザインの発明に飽きることはないように見える。

472,473,474番のブローチの見本（根付）は、入れ子状に重なる3つのトレーに、彫を施した鋳物（根付）が250個集められている。これは、紙挟み（portfolio）やタバコ入れの締め具として使うものである。日本人は駆使することができる最大限の芸術的技能を惜しみなく使っているようであり、デザインと製作の両面で優れた卓越性が見られる。金属の表面に施された沈み彫り、様々な金属を混ぜたもので浮彫り状に施されたこの上なく複雑な模様、それらの表現力はこれがすべて微小であることもあり、中世の名工であれ我が国の名工であれ最も著名な金属工でも、それに勝る例や匹敵する例は滅多に見られないものとなっている。

『公式図解カタログ』の日本の展示品に対する評価を読むと、日本人が日常生活で使用するものいかに気を配り、丁寧に制作し、現代にも通じる豊かな生活を送っている様子や小さな精巧な製品を作る技術力と優れたデザイン力が見て取れる。

4. 万博で示した日本の技術力とデザイン

1) 開港後から明治初期の日本の産業状況

安政の5か国条約に基づき、1859（安政6）年7月横浜・長崎・函館の開港が実現した。輸出品としては、開港後1年にして、生糸と茶が最も注目され、生糸は輸出総額の5割から8割に達した。両品以外の輸出品として、水油・銅・木蠟・海産物（昆布・すめ・乾鮑等）があった。幕末期を通じて最も輸入額の多かったのは綿織物であり、毛織物がそれに次いだ。これらは、イギリスをはじめとする資本主義国の機械制工場生産を代表する商品であった。綿・毛織物および綿糸以外のおもな輸入品としては、錫・鉛・鉄などをふくむ金属類と砂糖・米などの食料品があった¹⁹。江戸時代の貿易の統計は、正確には把握できない為、1868（明治元）年からの統計を用いて日本の貿易の実態を考察する。

表2 主な輸出品（単位千円）

	明治元年 (1868年)	明治11年 (1878年)	明治22年 (1889年)	明治32年 (1899年)	明治42年 (1909年)	大正7年 (1918年)	大正15年 (1926年)
生糸	6,425	7,894	26,620	62,628	108,609	370,337	734,052
製茶	3,582	4,284	6,157	8,499	13,157	23,056	12,112
水産物	495	1,566	3,014	4,278	7,130	17,099	22,669
石炭	84	884	4,347	15,165	17,297	32,009	31,032
紙類	41	52	219	936	2,728	28,469	16,661
陶磁器	23	169	1,450	2,181	5,258	19,958	33,182
漆器	—	—	628	989	926	950	1,767
輸出品総額	15,553	25,988	69,307	214,930	413,113	1,962,107	2,044,727

（『明治大正国勢総覧』東洋経済新報社1988年464-466頁。『明治二十三年外国貿易概覧』『明治三十二年外交貿易概覧』『大正七年外国概覧』『大正十五年外国貿易概覧』より作成。漆器は明治21年以前の資料がなく、明治22年より記載。）

表3 主な輸入品（単位千円）

	明治元年 (1868年)	明治11年 (1878年)	明治22年 (1889年)	明治32年 (1899年)	明治42年 (1909年)	大正7年 (1918年)	大正15年 (1926年)
綿織物	2,543	5,008	4,668	8,946	13,928	5,701	6,288
毛織物	1,948	5,420	5,455	9,027	9,080	11,486	29,224
砂糖	919	2,980	6,292	17,645	13,369	33,525	83,672
鉛	107	188	173	412	1,076	14,747	18,775
鉄類	86	1,366	2,238	10,714	21,189	219,853	103,650
製紙用パルプ	—	—	—	337	1,575	6,836	11,018
輸入品総額	10,693	32,875	66,104	243,332	416,257	1,778,091	2,377,484

（『明治大正国勢総覧』東洋経済新報社1988年、464-466頁。『大正十五年外国貿易概覧』より作成。）

我国の近代的な製紙工業は明治初期に始まり、1873(明治6)年ごろ製紙工場が設立された。製紙用パルプの輸入数量・金額が統計に初めて表れたのは1896(明治29)年で36,000円であった。和紙と西洋紙の生産高を比較すると下記の通りとなる。

表4 和紙と西洋紙の生産高(単位千円)

	明治27年 (1894年)	明治31年 (1898年)	明治41年 (1908年)	大正5年 (1916年)	大正14年 (1925年)
和紙	8,061	12,392	18,797	22,741	53,010
西洋紙	2,288	2,901	13,691	43,832	119,725

(『明治大正国勢総覧』東洋経済新報社1988年、554頁より作成)

和紙と西洋紙の生産高が逆転するのは、1915(大正4)年ごろであり、明治初期は圧倒的に和紙の生産量が多かった。1890(明治23)年外国貿易概覧に、「壁紙は著く増出し加フルに雁皮の外は和紙即ち東洋紙久留米紙半紙、和唐紙等大いに増加し」²⁰とあることから、幕末から明治初期の貿易における紙類の内容は、和紙が大きな割合を占めていたと推測できる。開港時の輸出品の5割から8割は、製茶と生糸であったが、日本が輸出できる数少ない製品として和紙、陶磁器が加わった。

日本の主要な手工業は、江戸時代後期から明治時代初期において、「江戸時代の、とくに18世紀後半以降各地で成長した手工業が『在来産業』としてそのまま成長を続けたものであった。たとえば酒は灘、綿糸・綿織物は畿内や濃尾・瀬戸内などで、醤油は野田や銚子、生糸・絹織物は桐生・足利などで生産の発展がみられた。」²¹さらに技術的には、「日本は綿糸紡績業など機械を使って生産する分野では欧米に後れをとったかもしれないが、醸造業のような人と力と感性で丹誠込めて生産する分野ではむしろ欧米のはるか上をいていたといえそうである。」²²

日本の貿易は開港後から1926(大正15)年までに輸出は131倍、輸入は222倍と順調に増大している。産物品目でみると特に輸出を牽引しているのは生糸、水産物、製茶などであり、輸入は毛織物・鉄類・砂糖など多様な品目となっている。当時の主要産業である生糸・茶は輸出が大きく、酒や醤油は輸出品として多くないが製造技術が優れていた。このような産業状況の中でオールコックが着目したのが和紙である。オールコックは和紙の素晴らしさを高く評価していた。

2) 日本の技術力—和紙と藩札—

オールコックは日本紙を万国博覧会に送付した理由として、次のように述べている。「日本政府から、なにか出品できるものがあれば教えてくれてと要請された。日本政府に出費をかけることを望まなかったし、すぐにも船積みしなければならなかったので、普通一般に使われているあらゆる種類の日本紙の見本を提案した。・・・67種類の紙とこの紙の恐ろしく入念かつ詳細に書かれた説明書を受け取った。」²³日本紙については、オールコックが熱海に旅行した時

の記述にも、「熱海では五色の紙がつくられる。宿の主人は、各種の見本をひとつずつ大きな束にしてわたしにくれた。わたしはそれを大博覧会に送った。」²⁴ という文章が見られる。

江戸幕府はオランダ商館との交流を通じて、オランダ人が和紙について「薄くてねばり強く、しなやかで加工性に富んでおり、布や皮革に代わる数多くの生活用品をつくることことができる。すなわち用途の広い素材であることを認識して、かれらは和紙の素晴らしさを評価していた。」²⁵ を知っていた。さらに、和紙は「その質は外見も色調もまさに天然の皮革に匹敵する」²⁶ と評されていた。このように高く評価されていた和紙を、西欧の市民が直接目に触れることが出来たのは、万国博覧会であった。

ヴィクトリア朝のペニー週刊新聞として当時人気があった「キャッセル社絵入り家庭新聞」(*Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor*)の「1862年国際博覧会特集」では、和紙について欧州よりはるかに技術力がまさり、用途も広いことに驚嘆して、次のように説明している。「日本の製紙業者は、欧州にいる我々にはまるでわからない卓越と熟練の域に達していることは明らかである。ここには、紙の防水コート、紙レザー、紙の傘、紙のポケットハンカチが展示されている。紙レザーの中には、皮なめし工場から出てきた皮革と同じくらい強さがあるように見えるものもある。壁紙用や筆記用、印刷用、包み紙用の様々な種類の紙が多く集められており、実際、紙の質と種類は、我が国のものよりはるかに数が多く、また、それらを組み合わせることによって、我が国では思いもつかないような目的に効率よく応用されている。」²⁷

日本の高い技術力を示す印刷物も展示していた。「様々な印刷見本も展示されている。その中にある日本の貴顕紳士録は、この帝国の名士全員の氏名・地位・住居が書かれた名簿である。また、日本の芝居のピラも一揃いあり(ロンドンの劇場より Jeddo の芝居小屋のほうが行楽地として流行しているため)、日本の百科事典が一冊、子供向けの物語本が数冊展示されている。その本には、日本人の諧謔的才能によって、この上なく痛烈なユーモアを交えた挿絵が入っている。」²⁸

さらに「このコレクションでは、硬貨が展示されている。銀貨は厚くて四角い形をしており、金貨はそれより大きい薄く、角が丸くなっている。金と銀の供給量は十分であるように見えるが、日本人は紙幣というものに辿り着いている。様々な額面の紙幣が、硬貨の近くに展示されており、これは、金貨と同様、すべて長細い形をしている。」²⁹ 和紙の技術と印刷の技術の高さが紙幣の流布を支えていた。この時代に不換紙幣が流通したのも希有のことであり、その技術の水準の高さに驚いていた。

「藩札」は、「日本の紙幣：額面が30~500cash(ファージング硬貨1枚分~6ペンス硬貨1枚分の額面)の紙幣一式。一部地域でのみ使用」³⁰ という説明とともに展示されていた。金銀が十分にありながらも、紙幣を発行する高度な金融システムが日本にはあったのである。この藩札の紙幣としての資質、技術、技法については、「藩札という紙幣が交換手段として広く流通するに際しては、その前提として良質かつ耐久性の高い紙の製造技術や高度の印刷技術が不

可欠となる。わが国においては、江戸時代までに紙の製造技術や印刷技術が高度に発達しており、それらが一体となって素材・製造技法から藩札の流通性を支えていたといっても過言ではない。・・・用紙の大半は楮等を原料として摂津国名塩村で製造されたことや、隠し文字を入れたり、透かしの入った用紙を利用するといった偽造対策がされていた。」³¹とされている。

藩札については、江戸時代の金融システムを欧米諸国と比較して、鹿野嘉昭が次のように指摘している。「近世の世界で、不換紙幣が流通していたことは極めて希有な事例といえます。欧米諸国でも紙幣が流通していましたが、金の預かり証か金貨と交換できる兌換券でした。江戸時代の藩政府や領民の経済感覚には驚かされるばかりです。」³²

ロンドン万国博覧会で展示された和紙は、技術力の素晴らしさとその技術を生かした不換紙幣が日本で広く流通していたことを示し、欧州の人々に大きな驚きを与えたのであった。さらに日本の展示品は、卓越した技術力とともにその奇抜なデザインで欧州の人々の興味を引いた。

3) 日本のデザイン—漆器と陶磁器—

オールコックが和紙以外で特に万博会場で見せたかったのは漆器、陶磁器であった。オールコックは「漆器や磁器や青銅製品の見本—それらの多くはひじょうに優良かつ珍貴なものである—を集めて、ヨーロッパの最上の細工品と綿密な比較テストにどこまで耐えうるかをしらべるために、大博覧会へおくれた。」³³と述べ、日本人のデザイン力を次のように賞讃している。日本人は油絵を描く技術はなく、遠近法の知識は限定的であるが、「人物画や動物画では、わたしは墨でえがいた習作を多少所有しているが、まったく生き活きとしており、写実的であってかくもあざやかに示されているタッチや軽快な筆の動きはわれわれの最大の画家でさえうらやむほどだ。」³⁴

さらに、日本の古い漆器を万国博覧会に出品するために集めた理由として、「職人的な技術より高度な産業技術における日本人の進歩を例証し、その文明を立証するためであった。」「これらの文明は高度の物質文明であり、すべての産業技術は蒸気力や機械の助けによらずに到達することができるかぎりの完成度を見せている。」³⁵と述べている。

「キャッセル社絵入り家庭新聞」は、展示品は少ないが、日本特有の製品における日本人の技能を見ることが出来、特に日本人一般の気質が広範な風刺的諧謔に傾倒していることを分かったと展示品について詳細に解説している。

「英国に、リーチ (Jon Leech 1817-1864年、風刺画家) は一人しかいないが、日本には、リーチのような人が、数千人はいないとしても、数百人はいるに違いない。それを確信するには、オールコック氏の展示による、衣装を締める用途の小さい金属製バックルの素晴らしいコレクションを見るだけでよい。その中にはたまらなく奇怪なデザインのものがあり、リーチ氏がパンチ誌 (英国の週刊風刺漫画雑誌) に連載を始めた当初の小さくて黒い木版画を彷彿とさせる。ある模様には、唸っている犬をこわごわなだめようとしている男が描かれていて、その

滑稽な表現方法は独特である。幽霊におびえている別の者の表情も独特である。」³⁶

この金属製バックルとは、江戸時代の装身具の一種であり、印籠やたばこ入れが落ちないように帯に結びつけた根付³⁷である。そのデザインの奇妙さだけでなく、金属の加工技術にも驚かされている。「青銅を地とした固くて小さい金属細工であり、レリーフ状の凸部模様は、金、銀、鋼、プラチナのいずれか、もしくはその4つの金属を混ぜたものである。プラチナがこれほど自由に使われていることから明白なのは、日本人にとってプラチナは、我々の場合よりはるかに一般的なものに違いなく、プラチナを溶かす秘訣について、我々の化学的知識ではやっと手に入れたばかりなのに、日本人はずっと前から知っていたということである。(中略) 青銅製の三脚燭台は独創的な蝶番使いにより、それほど分厚くならず小さい封筒のサイズまで折り畳めるようになっている。」³⁸

日本人が西欧人よりも化学的知識が高い分野があり、現代日本が世界に誇る小さく精巧な物を作る技術がすでに発揮されていたことが分かる。さらに、日本人の風刺の精神を現す例として具体的に以下のように述べている。

「磁器の大きな皿に描かれている2人の日本人女性は、フランスのボンネット帽とショールを付けて、深い髪飾りがついた絹のドレスを着ており、ドレスを広げているクリノリンは、我が国の美女でも滅多に身に付ける勇気がないほど大きいものである。そのうち1人は当世風の呑気な様子で望遠鏡を持って海を指さしており、もう1人は、欧州の習慣をさらに具現すべく、手袋をはめた手いっぱい青リンゴを持っている。背景には別に日本の女性が2人おり、日本の衣装に身を包み、この奇妙な格好の姉妹から衝撃と驚きを感じて縮みあがっている。」³⁹ 欧州人が日本に来たらどのような変化があるかを、高価な磁器に描くことによって警告しているのである。

日本人の技術力を示す例として、「ケースに展示されている卵殻磁器の見本は、強いて言えば、ほとんど卵の殻より薄い。ウースターで作られた卵殻磁器の有名な見本でさえ、これに比べれば単なる陶器である。」⁴⁰ や、この建物全体にあるすべての展示物の中で最も興味深い展示品として、ねじったガラス棒を何本か紐でつるしてあるように見える窓用の小さいブラインドを挙げている。「この棒状のものは、ガラスのように固く透明で鋭い。複数の棒でできたこの素晴らしい小さなスクリーンを見た人であれ、これから見る人であれ、見た目の素材、つまり純ガラス以外のものでできていると思うのは、そのうち100人もいないだろう。しかしオールコック氏は、米のゼラチンでできていると断言しており、彼の発言を裏付ける事実として、これは固くて鋭いが、ぶつかり合うと、柔らかい木の小枝のような音がする。」⁴¹ これは、金属に分類された展示品で「516番ブラインド用の筒状ガラスを模して米で作られた品」⁴² であると思われる。和紙と同様、植物から金属に匹敵するものを生み出しているのである。

第2回ロンドン万博では、日本人が日常使用している物が集められ展示された。それらの展示品は、「青銅をインクスタンドやたばこ入れ、燭台など日常的な家庭用品に適合させる上で、素晴らしい創意工夫が示されている」⁴³ と指摘されたように、筆筒、根付、和紙製品、陶磁器

など日常生活で使用している物の技術力、デザイン性が欧州では高く評価された。一方、万博会場を訪れた日本人は、機械や大砲など高い技術力を示す西欧の展示品と日用品がほとんどであった日本の展示品を比較し、恥ずかしく感じたようであった。

5. 日本のイメージ—文久遣欧使節団—

1) 文久遣欧使節団

1862年1月21日(文久元年12月22日)、竹内下野守(保徳)を正使、松平石見守(康直)を副使、京極能登守(高朗)を目付(監察使)、とする全36名(のちに2名加わる)の幕府使節団が、英国軍艦オーディン(Odin)号に乗ってヨーロッパの締約国(英国のほかにフランス、オランダ、プロシア、ロシア、ポルトガル)へと派遣された。使節団に与えられた主な役割は、開港・開市の延期を確約すること、西洋事情を視察すること、ロシアとの樺太境界を定めることであった⁴⁴。福沢諭吉は当時27歳で通訳として随行していた。また別に通辞森山多吉郎、調役淵辺徳蔵の二人も出張を命じられ、1862年5月30日(文久2年5月2日)にロンドンで一行と合流した。

使節団は最初にフランスを訪れたのち英国に渡り、第2回ロンドン万博開催日前日の1862年4月30日(文久2年4月2日)にロンドンに到着した。英国での開港開市延期交渉には、一時帰国中の駐日公使オールコックも加わってよく日本側を弁護したこともあり、日本側使節と英国政府は、同6月6日(5月9日)、新潟と兵庫の開港、江戸と大坂の開市を1863年1月1日から5か年延期することを取り決めた覚書(「ロンドン覚書」)に調印した。その後使節団は他の締約国とも同様の覚書を取り交わし、約1年間に及ぶ旅程を終え、1863年1月(文久2年12月)、帰朝した。

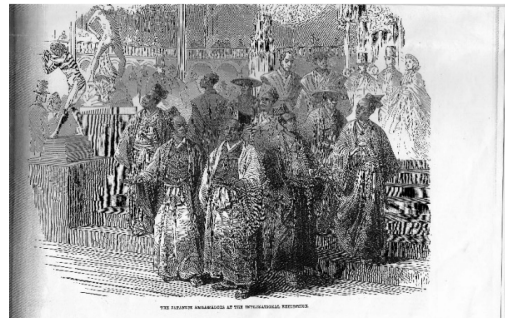
文久遣欧使節団のロンドン到着が、万博開催日前日であったのは決して偶然ではなく、オールコックの綿密な計画があったと思われる。「オールコックは幕末使節団の派遣と合わせて、国際博に日本製品を展示することによって、日本の国際舞台への進出を図った。」⁴⁵

万国博覧会の開幕式に参列した文久遣欧使節団について、*The Illustrated London News* は5月10日の記事で、次のように述べている。彼らの衣装はみすばらしく、半分刈った頭で、薄汚れた上着、言葉で言い表せない茶色のホランド(袴)、ペイパーブーツを身に着けていたが、特使たちが各自2本ずつ持っていた『財産』の刀は、素晴らしく見えた。さらに、日本の特命使節の風俗習慣について、「主に生魚を食べて生きているとか、特使たちの宿泊先のクラリッジホテル(国賓が宿泊するロンドンの高級ホテル)のウェイターの半数はアヘンの煙で窒息したとか多くの噂があるが、日本人について語られている話には、真実のかけらもなく、彼らはとても真面目で分別がある。その例として特命使節たちが、英国の庶民院を見学した時、名誉会員たちがその果てしない「改訂法」(Revised Code)について散文的に話し始めたとき、彼らは、通路からさっと立ち去ったことから、その機敏さを示す輝かしい証拠を残した⁴⁶。日本人は噂通りの野蛮人でなく、無意味な話にいつまでも付き合うことなく、場の雰囲気壊さ

ない節操と礼儀をわきまえているとしている。5月24日の“*A JOURNEY IN JAPAN (By our Special Artist)*”では、日本には西洋と同様に報道の体制があることを驚いている。「目下、一般大衆の注目はとくに、長い間封印されていた大日本帝国に向けられている。その理由は、我々の真ん中に日本の使節がいることであり、その随行員には、現代文明の付き物である特派員と特別画家が含まれていて、彼らは自己の能力により、西洋の野蛮人 (Western Barbarians) についてせっせと書き留め、その実態をつかんでいる。」⁴⁷ 随行員の中に特派員と特別画家が含まれることは、使節団の重要な役割として現地の情報の的確な収集と、自国への正確な発信が含まれており、この使節団がすでに近代文明を体現している存在としての評価を得ていたことが伺える。

さらに同じ記事の中で“*FROM OSAKA TO JEDDO*”とし、大阪から江戸までの旅行を掲載している。大阪を日本のパリと称し、次のようにその賑わいを紹介している。「大阪は人口がきわめて多く、日本人は、ここで8万人の軍隊を立ち上げることができる、と自慢している。また、陸路と水路の両方で商業を続けるのに良好な立地であることから、日本で最も優れた交易都市となっている。ここでは、豪商があふれ、腕の良い熟練工が仕事に精を出し、あらゆる類の製造業者 (manufacturers) が商品を作っている。」⁴⁸

記事から大阪が活気あふれ、多くの品物が製造され、日本にはパリのような都市が存在していることが伝わっている。記事は贅沢の中心地 (seat of luxury) であり、偉大な商業交易地である大阪から日本国内での旅の経験談を述べるとし、日本国内の様子を詳細に報告している。日本の特集記事が掲載されるほど、欧州の人々が万博会場の日本人と展示品の両面から日本という国に関心と興味を持ち始めたのである。



(図3 THE JAPANESE AMBASSADORS AT THE INTERNATIONAL EXHIBITION)

2) 文久遣欧使節団が見た日本の展示品

福沢諭吉は、万博会場を見学した様子を次のように詳細に書き留めている。「此場は、万国の製作品、新発明の器械等を集め、諸人に示す設る者なり。欧羅巴、亜米利加、亜細亞諸邦より、皆其国々産する所の名品、或は便利の器械を送り、且器械はその用法を示す為職人も来り、或は蒸気機を以て棉毛を績ぎ布を織り、薬品を以て夏時水を作り、大蒸気機を以て水を汲乾す等の仕掛け、皆場中にあり。(中略) 場内の一局に日本の品物を集たる所ありたれども、物の数甚だ少なし。唯漆器、陶器、刀剣、紙類、其外小細工物のみ。其中に肥前通用の銀札数枚あり。日本品は外国に比すれば枚数甚だ少なしと雖も、総品物の価二十余万両なりと云。」⁴⁹ 日本の展示品は、欧米の機械類に比べて小物が多く、数も少なかったが、比較的高価な品である

との自負はあった。

さらに博覧会の意義について、『西洋事情』で次のように述べている。「博覧会は、元と相教へ相学ぶの趣意にて、互に他の所長を取て己の利となす。之を譬へば智力工夫の交易を行府が如し。又、各国古今の品物を見れば、其国の沿革風俗、人物の知遇をも察知す可べきが故に、愚者は自ら励み、智者は自ら戒め、以て世の文明を助くること少なからずと云う。」⁵⁰ 福沢は博覧会の参加意義を強く感じていたのである。

万国博覧会を訪れた瀨辺徳蔵は、江戸幕府が遣わした品物は「紙類材木類等で、見本のつもりで材木は纜貳寸六面位つ、削りもしないで送った。横浜に居留指定いる者が自分で買って送った品物も数多くあり、古着の女衣服刀剣も粗製の品其外弓箭甲冑漆器陶器の類甚だしきは提燈土履膳椀木枕傘と全く骨董店の如く雑貨を集しもの。」⁵¹ であり、日本の展示品の粗末なことを嘆き、その原因を次のように指摘している。「元来此展観（博覧会）の企は、各国の産物を博覧するを名として宇内の商買來会し、自国の誇るべき産物製品、器械等を衆人に見せ、多く国産の輸を得、利を招くの為なれば、此場に品物を出すにも多分の税出し、又遠海運送の費も不厭して偏に国産を各国に知らしむるを主とす（略）。本邦には未だその意を知らざれば、産物を他に売弄するを悦ばずして、その粗物のみを出せしなり。是も全く宇内に交らざる故なり」⁵²

江戸幕府が万博会場に送った品物は、恥ずべき骨董品や雑貨類であり、幕府が博覧会の効果と意義を理解し、税金を万博出展のために出すべきであると非難している。博覧会出展が輸出増大、国力向上に大きく貢献することを認識していたのである。

6. おわりに

長く鎖国体制にあった日本が開港した時、英国ではすでに産業革命が起こり、多くの機械が発明され、手工業から工場制工業に移行していた。そのような世界で開催されていた万国博覧会に突然参加した日本が、展示できる製品は日本独自の物、伝統工芸品しかなかった。1853(嘉永6)年、日本に開港を迫ったペリーが、「日本の手工業者は世界に於ける如何なる手工業者にも劣らず練達であって、人民の発明力をもっと自由に発達させるならば日本人は最も成功している工業国民に何時までも劣ってはいないことだろう。」⁵³ と指摘したように、日本の伝統工芸品は日本人の高い技術力に裏付けられていた。

1873(明治6)年、明治政府はオーストリアで開催されたウィーン万国博覧会参同について次のように一般に布告した。「御国に於て従前器械の発明なしと雖も人工自ら精妙特詣の處なしと云うべからず。殊に生糸、蚕卵紙、茶、紙、陶器、漆器等の製造に至つては、曾て賞讃の名あり此上益精良に遡らば終には東洋第一の物産となり宇内各国とも之を求需して日用の必需品とするに至らば国の荣誉を馳せ繁昌を享くべきは言を会う俟たざるべし。」⁵⁴ さらに万国博覧会参加の意義を、「当時において是我国製造工業の発達と貿易の隆昌とを期せんが為には、全国の精良品を一堂に展列し以て多数の観覧に供するを得べき万国博覧会を措いて他に好機存

せざしが故なり。」としている。

オールコックが収集し、第2回万国博覧会に展示した和紙、陶器、漆器は、欧米でその技術力とデザインが高く評価され、その後の輸出増大につながり、外貨を稼ぐほど力をつけたのである。日常品であり万博会場を訪れた日本人の目には西欧の大砲などと比べて粗末なものに目に映った。しかし、西欧人からは展示品の卓越した技術力とデザインの素晴らしさに驚愕の目が向けられた。

尚オールコックが高い評価をつけていた和紙については、「明治初期の和紙業界は、藩権力による生産統制が消えて自主生産の体制となったが、他方洋式機械製紙業の移植、洋紙の輸入、欧米文化様式の導入などによって、需要を圧迫された。しかし、国民生活の文明開化とともに紙の需要は全般的に増大し、和紙の特徴が評価されて輸出されるものもあり、明治30年代の後半期、日露戦争の頃までは優勢を保っていた」⁵⁵

1867(慶応3)年パリ万国博覧会には、江戸幕府、佐賀藩、薩摩藩が出展し、1873(明治6)年ウィーン万国博覧会には、明治政府が初めて政府として参加した。明治政府はその後も万国博覧会に積極的に参加することで、日本の近代国家としてのイメージと日本の伝統工芸品を欧米にPRすると同時に、欧米の優れた産業技術の吸収に努め、貿易拡大を通して、国力向上、産業振興を図った。

明治政府は殖産興業政策を目標に掲げ、貿易の進展に注力するが、万博で一定の評価を受けたことが、日本の近代化の一助となり、1900年代に日本は国力を蓄えた結果、ロンドンで1910(明治43)年日英博覧会を開催し、英国と肩を並べるようになったのである。

-
- 1 松村昌家『ロンドン万国博覧会と水晶宮ーロンドン万国博覧会(1851年)新聞・雑誌記事集成 別冊解説』本の友社、1996年、25頁。
 - 2 佐野真由子『オールコックの江戸』中央公論新社、2003年。
 - 3 松村昌家「一八六二年ロンドン万国博覧会会場の幕末使節団(一)」大手前大学人文科学部論集4、2003年、120-104頁。
 - 4 前掲『ロンドン万国博覧会と水晶宮』25頁。
 - 5 吉田光邦編『図説万国博覧会史1852-1942』思文閣出版、1999年、33頁。
 - 6 松村昌家『水晶宮物語ーロンドン万国博覧会1851ー』リプロポート、1986年、185頁。
 - 7 平野繁臣『国際博覧会歴史事典』内山工房、1999年、11-12頁参照。
 - 8 前掲「一八六二年ロンドン万国博覧会会場の幕末使節団(一)」104頁。
 - 9 国立国会図書館2010-2011 National Diet Library, Japan, All Rights Reserved.
<http://www.ndi.go.jp/exposition/s1/186.html> 2014年11月11日参照。
 - 10 松村昌家『1862年国際博覧会資料総覧 別冊日本語解説』ユーリカ・プレス、2014年、4頁。

- 11 前掲『国際博覧会歴史事典』16頁。
- 12 神奈川在中のイギリス商人ミハエル・モースが、1860年11月27日幕府の遊獵発砲を犯し、神奈川奉行支配向の渥美邦太郎に取り押さえられた時、同人の腕を打ち抜いき、のちに国外追放処分を受けた事件。
- 13 宮永孝「富士山に登ったヨーロッパ人第一号オールコック英公使」『社会志林』法政大学社会学部学会、2005年、174頁。
- 14 同上152頁。
- 15 佐野真由子『オールコックの江戸』中央公論新社、2003年、173頁。
- 16 同上177頁。
- 17 *The Illustrated Catalogue of the Industrial Department, Foreign divisions , The International Exhibition of 1862, London : Official Illustrated Catalogue & Cassell's Illustrated Family Paper Exhibitor* Masaie Matsumura, Eureka Press, 2014, Volume 4 , pp.89-101.
- 18 Ibid.
- 19 服部一馬「開港と日本資本主義」『日本経済史体系5』東京大学出版会、1965年、7-8頁参照。
- 20 大蔵省国税局『明治二十三年外国貿易概覧』143頁。
- 21 井奥成彦『日本経済史1600-2000 歴史に読む現代』慶応義塾大学出版会、2009年、78頁。
- 22 同上80頁。
- 23 ラザフォード・オールコック『大君の都』上、山口光朔訳、岩波書店1974年、273-274頁。
- 24 ラザフォード・オールコック『大君の都』中、212頁。
- 25 久米康生「海を渡った日本の和紙—和紙を高く評価し西欧に発信した蘭人一」『歴史海流』3、海越出版社、1997年、32頁。
- 26 中井昌夫訳『オイレンブルク日本遠征記』上、雄松堂書店1969年、89頁。
- 27 *Cassell's Illustrated Family Papers Exhibitor-containing About Three Hundred Illustrations, with Letter-press Descriptions of All the Principal Objects in The International Exhibition of 1862*, Published by Cassell, peter, & Galpin, London,1862,Volume 5 , p.131.
- 28 Ibid.
- 29 Ibid.
- 30 *The Illustrated Catalogue of the Industrial Department, Foreign divisions*, op. cit.,p.99.
- 31 日本銀行金融研究所「ワークショップ『藩札の資質・印刷技法について』の模様」『金融研究』1997年3月第16巻第1号、49-50頁。
- 32 鹿野嘉昭「江戸時代に学ぶ」日本経済新聞2014年9月19日朝刊。

- 33 前掲『大君の都』中、43頁。
- 34 ラザフォード・オールコック『大君の都』下、177-178頁。
- 35 同上201頁。
- 36 *Castell's Illustrated Family Papers Exhibitor-containing About Three Hundred Illustrations, with Letter-press Descriptions of All the Principal Objects in The International Exhibition of 1862*, Published by Cassell, peter, & Galpin, London,1862,Volume 5, p.131.
- 37 装身具の一種。江戸時代、印籠やたばこ入れを腰に下げる際、紐の端にこれを取付け、帯をくぐらせて外に出し、紐がはずれないようにしたもの。木、竹、骨、角、金属、水晶、象牙などの材料で、人物、動物、器財などの細密な小彫刻を施した。
- 38 *Castell's Illustrated Family Papers Exhibitor-containing About Three Hundred Illustrations, with Letter-press Descriptions of All the Principal Objects in The International Exhibition of 1862*, Published by Cassell, peter, & Galpin, London,1862,Volume 5, p.131.
- 39 Ibid.
- 40 Ibid.
- 41 Ibid.
- 42 *The Illustrated Catalogue of the Industrial Department, Foreign divisions*, op. cit.,p.98.
- 43 *Castell's Illustrated Family Papers Exhibitor-containing*, op.cit.,p.131.
- 44 外務省ホームページ「開港開市延期問題と文久遣欧使節団派遣」http://www.mofa.go.jp/mofaj/annai/honsho/shiryo/j_uk/02.html、12月3日参照。
- 45 松村昌家『1862年国際博覧会資料総覧 別冊日本語解説』ユーリカ・プレス2014年、6頁。
- 46 “ECHOES OF THE WEEK AND THE INTERNATINAL EXHIBITION” MAY 10,1862, *The Illustrated London News* p.482.
- 47 “A JOURNEY IN JAPAN (By Special Aritist)” MAY 24, *The Illustrated London News*, p.537.
- 48 Ibid.
- 49 福沢諭吉「西航記」『福沢諭吉選集第一巻』岩波書店、1980年、33頁。
- 50 福沢諭吉「西洋事情初編巻之一」『福沢諭吉選集第一巻』岩波書店、1980年、128頁。
- 51 洲辺徳蔵『欧行日記』『遣外使節日記纂軸輯第三』日本史籍協会、昭和46年、50頁。
- 52 同上。
- 53 M・C・ペリー『ペルリ提督日本遠征記(四)』土屋喬雄・玉城肇訳、岩波書店、1990年、128頁。
- 54 永山定富『海外博覧会本邦参同史料(第1輯)』フジミ書房、1997年、8-9頁。

55 久米康生「明治期の和紙工芸」『和紙文化研究第6号』1998年、8－9頁。

図1. *The Illustrated Catalogue of the Industrial Department, Foreign divisions, The International Exhibition of 1862, London : Official Illustrated Catalogue & Cassell's Illustrated Family Paper Exhibitor* Masaie Matsumura, Eureka Press, 2014, Volume I.

図2. *The Illustrated London News*, SEPT. 20,1862, p.320.

図3. *The Illustrated London News*, MAY 24,1862,p.535.